

令和5年度 学校運営協議会及び学校評価に関する検証委員会第1回会議

1 日時 令和5年10月19日（木）10:00～12:00

2 場所 京都市総合教育センター 第2研修室

3 出席者

(1) 委員

天笠委員、天野委員、木村委員、小松委員、笠沙委員、三吉委員

(2) 事務局

教育委員会事務局職員

4 次第

(1) 開会

(2) 委員自己紹介

(3) 委員長・副委員長選出 ※小松委員長・天笠副委員長選出

(4) 議事

- ・京都市における学校評価及び学校運営協議会の状況について
- ・検証委員会の学校訪問について

(5) 委員長まとめ

(6) 閉会

5 委員等の主な発言や質疑応答

※以下敬称略

(京都市における学校評価及び学校運営協議会の状況について)

天 笠：教育DXビジョンについて、今後3年間で取り組まれていくとのことだが、3年後の学校姿としてどういう状態をイメージされているか、また、そのために1年毎にどこまで到達することとされているのか知りたい。

事務局：変化が激しい分野に関する計画ということもあり、計画期間について、行政の計画で多く採用される5年間ではなく、3年間とした。また、学校ごとに取組の進捗等に一定の差があることもあり、一律に1年毎にここまでという指標を設定するのではなく、各校の実情を踏まえて取り組むこととしている。取組にあたっては、各校にGIGA主任を配置しているほか、指導主事等が学校へ支援・助言している。

目指す学校の姿は、一人一台端末の環境下、子どもたちが端末を日常的・主体的に活用した学びに取り組めること、そのために、教員や学校全体の活用の質を上げることである。

なお、参考資料の「KYOTO×教育DXビジョン（概要版）」の下部にあるとおり、ビジョンの進捗を把握するための指標を複数掲げている。

天 笠：京都市の目指す子ども像・学校像を明確に意識して、教育DXビジョンを進めてほしい。

木 村：保護者目線からは、教科書だけでなくタブレットも鞆に入れることになり、体への負担が大きくなったと感じる。昨年度「今後は教科書をデジタル化していく」と聞いたが、変化を感じない。進捗はいかがか。

事務局：教科書のデジタル化は、まず英語の教科書から始めており、他の科目についても国の動向を見ながら試行中である。

天 野：子どもではなく、親がデジタル化についていけないことがあるように思う。

小 松：このDXビジョンについて、保護者はどの程度認識があるのか。

三 吉：参観後の懇談会の時間に、保護者に実際に子どもが使っている端末に触れてもらう機会を設けたが、保護者の参加率が悪かった。ごく一部の保護者しか、子どもが端末をどのように使い、どんな学習をしているのかを把握していない。

小 松：子どもたち自身がしっかり端末を活用し、学ぶことも大切だが、保護者も子どもたちがどのような学習をしているのか理解してほしい。今後、家庭学習他、デジタル機器の上手な活用が大きなテーマとなると思う。なお、DXビジョンの6つの道筋が大切であるが、大きく分けると、子ども自身の学び、教職員がDXをどう活用するか、情報モラルに関すること、キャリア教育に関することが大切である。ICTに関することは、1ヶ月単位で急速に変わっているので、学校差や個人差にも大きな幅があることが大きなテーマである。大学では、教職を目指す学生に対し、ICTに関する研修等はどうしているか。

竺 沙：ICTに関する科目は必修としているため、基本的な知識は身に着け、社会へ出れるようにしている。科目以外でも、研修の場も設けている。また、全員が授業支援ソフトのアカウントをもち、授業研究できるようにしている。

小 松：ICTの活用については、幼稚園から大学まで継続する事項なので、各段階での学習が重ならないように、繋がりを意識しないといけないと感じた。学校差が出てきたときに先生方が苦勞する。学校現場では、ICTの活用についてどのように受け止めて実践しているのか。

藤 田：（小学校）ICTの活用については、授業の中でいかに有効に使い、意義を持たせるかが重要である。また、家庭学習でデジタルドリルを利用することで、教職員の働き方改革にも繋がっている。

校務改善については、教職員の研修や会議で一人一台端末を活用することで、記録にも残るので効率的に行えている。

長谷川：（総合支援学校）支援学校では一人一台iPadを配備している。タッチパネルなので、肢体不自由の子も操作できており、学習だけでなく友達とのコミュニケーションにも使っている。

豊 田：（幼稚園）他府県の状況を聞くと、京都市の幼稚園はとても充実している。京都市では、園児全員ではないがiPadが配備されており、教員にも一人一台配備しており、先進的に研究できている。また、幼稚園でも小中のように連絡アプリを導入し、保護者への連絡等を行っている。ただし、幼稚園は基本的に実体験を大切にしているので、実体験と併せてICTをどのように活用するのか検証していきたい。

小 松：それぞれの発達段階に応じてどう活用するのが大切である。

天 竺：生活科の授業の中身についてどのように考えられているか。

藤 田：幼稚園で実体験を積んで小学校に上がってくるので、幼稚園で学んだことを小学校でうまく繋いでいくには体験も大切である。生活科は自分でアイデアを出したりすることが大切である。

天 笠：生活科ができてから 30 年経ち、デジタルの社会・将来に向けて中身を見直さないといけない地点に来ている。DX ビジョンの 6 つの視点は、カリキュラムマネジメントとつながりがあるので、そのような視点で進められてはどうか。

小 松：生成 AI について、京都市ではどのように対応を考えられているか。

事務局：文科省が生成 AI に関する暫定的なガイドラインを 7 月に出したので、京都市としても対応を検討中である。京都市では、一部の高校で国の研究指定を受けて取組を始めたところであるが、小中では使用していない。教職員に対しては、必要な研修を行うことなどが必要であると考えている。

小 松：学校運営協議会の制度や実態、学校評価について意見はあるか。学校運営協議会のメンバーが固定化した際に、活動に新鮮さがなくなってしまうので、私自身も理事を務めている学校運営協議会では、新しい取組を行うよう心掛けている。

天 野：昔、学校を取り巻く課題が山積していた頃は、学校運営協議会の制度はなく、地域応援団として集まっていた。今は学校運営協議会として協議すべき事項がある際に集まるが、年 2 回ほどである。

小 松：校長先生が変わることで地域との交流やほかの先生方との関係性など、困りごとなどはないか。

天 野：学区の横のつながり（自治連合会や PTA）、行政区を超えた繋がりができつつあるが、共働きも増えてきており、次のなり手を探すとすると、土日の行事参加が難しいなど、次の世代の巻き込み方が悩ましい

木 村：上京区は固定メンバーになってしまっている。学校評価について質問だが、学校が会議で出た内容（評価）について、具体的にどのように現場に落とし、改善されているのか知りたい。

藤 田：すぐ改善できることは必ず対応している。今年はアンケートの評価項目について、管理職だけではなく、教職員も含めもう一度見直したいと思う。実際に、一項目ずつを抜粋し、チームで話し合い、具体的な項目にしたことで評価結果の数値が上がった。アンケート評価は地域の方、保護者の方、教職員を含め、意見を出すだけでなく、共に子どもを育てていくという立場で見直していきたい。

なお、学校評価アンケートの項目について、「分かりにくさ」が回答率の低い理由ではないか、という意見をいただき、より具体的な項目に変え、そこで頂いた意見や課題について全教職員に共有している。他部署に関わることであれば、各関係部署に見直していただき、次回の学校運営協議会の際に、改善点・改善されなかった点を報告してもらっている。ただし、教職員や学校運営協議会には共有しているが、地域や保護者には十分広められてないことが課題である。

小 松：生徒にもアンケートを取っておられるようだが、アンケート結果からどのような特徴や分析をされているか？

長谷川：子どもたちの発達段階により、理解が難しい点はあるが、中学校・高等部はできている

点については褒め、できていない点については、頑張ろうという表現で伝えている。

豊田：幼稚園では、毎日、保護者と担任が会う機会があるので、保護者からの意見に対しすぐに対応できている。また、毎月学校運営協議会の委員の方にお便りを渡しに行く機会があり、地域の方の意見にも対応できるため、あまり低い評価にはならない。毎日会えることで、初期に対応できるのは幼稚園の強みでもある。

天野：地域の児童館が児童館祭りをする際に、保育園・幼稚園・小学校・中学校・高校の校長・教頭先生が集まるので、横のつながりがあり、情報が早い。

小松：学校運営協議会の制度が始まった際は、保護者からとまどいの声もあった。京都での学校運営協議会制度について、PTAの皆さまから見たらどのように理解されているか。

三吉：私の地域では、地域、学校、PTA 役員の連携は図れている。ただし、PTA 役員としては交流がとれていると感じるが、PTA 役員以外の保護者については連携があまり取れていないのが現状。一部、子育てに関して学校任せになっている所があるが、学校は地域との連携を取ってくれている。PTA を担当していると、地域とのつながりが大事だとその時は感じてくれているが、離れるとつながりが薄くなる。

小松：保護者や地域の方から、学校運営協議会というのはどのような組織で、何をしてるか分からないという話も聞く。

天野：お祭りなども学区によって昔から住んでいる人はやっているが新しく入って来られた人との交わりが少ない状況はある。

小松：改めて今年度どのような議論や活動をしていけばよいか御意見を下さい。

笠沙：学校評価をすることで、初めて見えてくることもある学校訪問の際に、先生方の授業雰囲気、子供の様子等見てみたい。

小松：私は大阪の自治体で教育委員をしているが、小学校の教職員の選考倍率が 2.8 倍だった。また、東京などは 1.0 倍らしく、質どころか数が心配になった。

天野：コロナがあけて、今年に入り文化祭や体育祭がフルで出来るようになった。小・中・高等学校などの運営を、子どもたちがリーダーシップを取ってするようになっており、すごいと思う。

小松：私たちは新型コロナウイルス感染症という大変厳しい経験をした。そうした経過も頭に置きながら、この検証委員会として、より良い学校教育のため、今年度も我々の役目を果たしていけたらと思う。

天笠：学校運営協議会のメンバーについて、若い世代が参画できる仕組みづくりを検討していく必要があるのではないか。

(検証委員会の学校訪問について)

事務局：訪問日程や訪問候補校について説明。

→元町小、向島東中の 2 校を訪問することを確認。

以上